

鬼北町立広見中学校

道徳通信

道徳主任 酒井 智有

NO. 68

令和8年5月21日発行

よりよく生きる

独立行政法人国立青少年教育振興機構から、子どもゆめ基金10周年記念として、過去に学校に送られた「かがやく先輩からのメッセージ」は、子どもたちに向けて送られたメッセージをまとめたものですが、非常によい内容ですので紹介します。

「かがやく先輩からのメッセージ」 吉田沙保里(よしだ さおり)

いつも元気いっぱい、「吉本興業に入りたい」と思うくらい、友達を笑わせることが好きでした。休み時間はドッジボールをしたり、一輪車に乗ったり、スポーツはだいたいできました。体育の成績はいつも「5」。歌も大好きで、母が合唱コンクールの歌を覚えてしまうくらい、家ではいつも歌っていました。でも、勉強は苦手でした。



レスリングは3歳から始めました。選手だった父が家に道場を作り、子どもたちに教えていたんです。二人の兄に続いて、私も自然に始めたようです。小学生になると、試合に出るようになりました。男の子にも勝っていたので、「私は強いのかもかもしれない」と自信もありました。そう思えるだけ、毎日練習していました。父との練習は、平日は夜の7時から9時まで2時間。休みはなし。父はとても厳しく、「お腹が痛い」「眠たい」という言い訳も一切、通用しませんでした。練習中も「集中しろ！」と、竹刀でびびびしたたかれました。何度も「やめたい」と思いました。レスリングが嫌というより、練習や試合があるから、友達と遊んでいても、いつも途中で帰らなくてはいけないことが残念でした。そのたびに、「何でレスリングをやっているのかな」と不思議な気持ちになりました。「やめたい」と母に言うと、「お父さんに言いなさい」と言われる。でも、父が恐くて、「やめたい」なんて言えなかった。それで、「もう少しやろう」と思い直すんです。今はそんな環境も、レスリングを厳しく教えてくれた父にも感謝しています。続けてきたことで、オリンピックで金メダルをとれましたから。

初めて「オリンピックに出たい」と思ったのは中学1年生のとき。柔道で田村(現・谷)亮子さんが活躍する姿を見て、「あんな選手になりたい」と思いました。目標ができたことで、練習や毎日の生活も変わりました。「遊びたい」「お洒落したい」と思っても、「それはいつでもできる」と練習に集中しました。一番変わったのは食事です。牛乳は大好きで人一倍飲んでいましたが、野菜が大嫌いで、お菓子ばかり食べていました。だから、なかなか筋肉もつかないし、思うように強くなれないんだと気付いてからは、野菜を食べるようになりました。今もナスとピーマンは苦手ですが、あとは何でも食べます。夢や目標をもつと、人は変わるんですね。

10代の頃、試合に負けて悔しい思いはしても、悩むことはなかったです。勉強ができなくても、「体育ができればいいや」と思っていたし、意地悪を言われても、「言いたい人には言わせておこう」と気にしなかった。そんなプラス思考も、前へ前へと攻めるレスリングに向いていたのかもしれない。

勉強する時は勉強、遊ぶ時は遊ぶと、何かをやる時は一生懸命やってみてください。「嫌だな」と思っていると何事も上達しません。目標を持つことも大切。私が強くなれたのも「オリンピック」という目標があったから。小さくてもいいから目標を持って、いろんなことに挑戦してほしいなと思います。